

イスラームへの改宗

ムハンマド・ハニーフ・シャヒード著

ダール・アルサラーム社
リヤード サウジアラビア
1999年

アッラーの御名において

最も慈悲深く、最も慈愛遍ねき御方

「本当にアッラーの御許の教えは、イスラーム
（主の意志に服従、帰依すること）である。
啓典を授けられた人々（ユダヤ教徒とキリスト教徒）が、
知識が下った後に相争うのは、
只彼らの間の妬みからである。
アッラーの印を拒否する物があれば、
アッラーは本当に清算に迅速であられる。」
（イムラーン家章 3 : 19）

目次

出版社の言葉

改宗者のイスラームに関する簡潔な見解

穏健さと節制がイスラームの基調である
イスラームのみが全員の需要を満たせる
イスラームのみが今日の諸問題を解決する
イスラームはいつもその簡潔さと信者の専心振りで私を魅了した
イスラーム信仰の純粹さと単純さ
イスラームに真の信仰を見出した
イスラームは私の考えとぴったり適合するので受け入れた
イスラームは私の求めていた宗教だ
もし英国と欧州がイスラームになると、再び永久に強くなるだろう

聖コーランについての改宗者の簡潔な見方

聖コーランは、誰の魂であれ最も求めるものを含んでいる
私はムスリムによる聖コーランの翻訳を学んだ
聖コーランは真実に満ちており、その教えは实际的であり、
また独断的なところや神秘性がない！

イスラームの入り口で

どうしてイスラームを受け入れたのか？
私の入信の場合
何が私をイスラーム入信に導いたか？
どうしてイスラームを受け入れたか？
どうして私はムスリムなのか？
どのようにしてイスラームに近づいたか？
イスラームへの改宗
どのようにしてイスラームにコミットしたか？
どうして私はムスリムになったのか？
どうして私はイスラームを受け入れたのか？
イスラーム — 私の選択
どうして私はイスラームを受け入れたのか？
アーイシャ・キムへのインタビュー
どうして私はイスラームを受け入れたのか？
どうしてイスラームは私の選択なのか？
私のイスラームに対する誓い
どうして私はイスラームを受け入れたのか？
どのようにして私はイスラームに入信したのか？

出版社の言葉

すべての称賛は、世界の主であるアッラーのために。そしてわれわれの預言者（アッラーの祝福と平安あれ）、その家族及び教友たちに言及することについて、アッラーの嘉しあれ。

アッラーはムハンマド（祝福あれ）を失われたメッセージを人類に伝えるために、その最後の使徒として選ばれた。このことはイスラームが一つの民族に向けられたものではなく、全人類に向けられたものであることを物語っている。それはアッラーが認められる唯一の教え（ディーン）である。アッラーは言う。

「イスラーム以外の教えを追求する者は、決して受け入れられない。また来世においては、これらの者は失敗者の類である。」（イムラーン家章3：85）

世界のどの都市でもムスリムがいないところはないくらいに、イスラームはいつも大きな反響を得てきた。その理由は、イスラームを学ぶもので理性を働かせれば、確信を持ってそれを受容せざるを得ないからだ。

ダール・アルサラーム社は本書の中に、イスラームを客観的に学んで、その意思も持って改宗した人達の証言を集めた。イスラームはその正当性を実証するのに、そのような証言を必要としているからではない。われわれが意図しているのは、イスラームへの改宗をまだ考えていない人達が、すでにそうした人々の証言を読むことによって、彼らの洞察を共有し、イスラームは年齢に関係なくまたこの世が続く限り適用できるものだと言うことを知るためである。

そしてわれわれの究極の目的はアッラーのメッセージを伝達して、われわれが感謝し称えているアッラーからの報酬を期待しつつ、地獄の苦しみから出来る限り多数の人を救うことである。

アブド・アルマリク・ムジャーヒッド
総支配人

改宗者のイスラームに関する簡潔な見解

穏健さと節制がイスラームの基調である

イスラームの簡潔さ、モスクの強いアピールの力と圧倒的な雰囲気、忠実な信徒の熱心さ、一日五回の礼拝を守る世界何百万人という人の確信を抱かせる認識 ― これらが私を最初から魅了した。

他宗教へのイスラームの寛大さは、自由を愛する人々にとって、素晴らしいことだ。ムハンマドはその支持者たちに、新旧の聖書の民に厚遇を与えるように訓戒した。そしてイブラーヒーム、モーゼ、イエスは、唯一神の預言者たちであることを認めた。本当にこれは寛大なことで、他宗教よりもはるかに進んだ態度である。

何事であれ穏健さと節制を求めるのはイスラームのキー・ポイントであるが、それが私から見てイスラームが無条件にパスした点である。

ドナルド・S・ロックウエル大佐 米国

イスラームのみが人類家族全員の需要を満たせる

キリスト教は多くの事柄と同じ運命をたどり、いずれ滅び、人類にとって真実の神の宗教に永劫に席を譲ることになる。それがイスラームである。それは絶対真実、誠実さ、寛大さ、人類の利益を目指し人々に正しい道を示している。イスラームだけで全人類の需要を満たすことが出来、そしてキリスト教のような「うわべの信仰」ではなく、ムスリムだけが「真実の同胞関係」を実現しているのである。

ジャラウッディーン・ローダー・ブラントン卿 英国

イスラームのみが今日の諸問題を解決する

西洋人にとって、イスラームの主な魅力はその簡潔さである。確かに同じくらいアプローチが容易な教えが一つや二つは他にもあるが、悲しいかなそれらは預言者（祝福あれ）の信心のような活力を持たず、イスラームが提供するような精神的道徳的な高揚を伴わない。

イスラームはその寛大さという徳によってもアピールできる。おかしいことにキリスト教の非寛容性が、私をして初めにイスラームに向かわせたものだった。

キリスト教教会は今日的な諸問題と取り組むことは全く出来ない。イスラームだけが解決策を提供している。

ジョーン・フィッシャー

ニューキャッスル

イスラームはいつもその簡潔さと信者の専心振りで私を魅了した

イスラームを受け入れてからは、人生の曲がり角に来たと感じている。これを説

明するため、わたしはなぜムスリムになったかについて少々語りたい。わたしはいわば自分を心理分析にかけてみるのである。

イスラームは常にその簡潔さで私を魅了し、またその信徒の専心振りにも感心した。わたしはキリスト教を除いては、すべての宗教を冒涇でその信徒は異教徒であると教えられてきた。

イスラームは信仰の五柱の一つである礼拝によって、物質主義の障害を克服する非常に実際的な方法を教えてくれた。イスラームの礼拝は、アッラー、私の魂、そして私の親愛なる被造物に対する義務を常に意識させてくれる。

ハーリド・デラルンガー・レムラフ

イスラーム信仰の純粹さと単純さ及びその明白な真実が、私に特に アピールした

イスラーム信仰の純粹性と簡潔さ、ドグマと神聖化主義からの自由、そしてその明白な真実性が私に特にアピールした。またムスリムの正直さと誠実さも、キリスト教徒には見たことないほどに立派だった。

イスラームのもう一つのすばらしさはその平等である。イスラームのみが人と人の間の平等を本当に維持しており、他のあらゆる宗教には見られないことだ。イスラームの信仰は、団結も生み出す。

イスラームの教えはまた世界で最も清潔な宗教だ。と言うのは、ムスリムは一日に五回、露出している部分を洗浄しなければならないからだ。これは他の宗教にはないことだ。

A. W. L. ヴァン・キーレンバーグ (M. A. ラハマーンとして知られる)

イスラームに長年探していた真の信仰を見出した

わたしはかなりの自由時間を、聖コーランの英語訳学習に当ててきた。そして預言者ムハンマド（祝福を）の特定の言葉も何回も読み直し、漸く長年探し求めてきた真実の信仰がこのイスラームにはあるということを知った。

もし西洋の国々の人々がイスラームの意味とその教えを十分知るならば、イスラームの立場は日ごとに上昇するだろうことを確信する。しかし残念ながら多くの「自由思想家たち」など古い教義にこだわる人々は、まだまだ大変な不安感を持っている。と言うのは、見解を異にする色々の原則に従った従来の信仰を捨てて、イスラームを受け入れるのには、道徳的な勇気を必要としているのである。

ウォーカー・H. ウィリアムズ

イスラームは私の考えとぴったり適合するので受け入れた

人は今日、キリスト教やユダヤ教で教えられるよりも、イスラームによって真のキリスト教徒やユダヤ教徒になれる。

イスラームでは、寛容さと世界的な同胞関係がある。だから私は、あえて言えば、イスラームを受け入れたのは、それがアッラーとその美しい御計らいに関する私の考えにちょうどうまく適合したからだ。私が理解する唯一の信仰でもある。本当にその簡潔さと美しさは、小さな子供でも理解できるほどだ。

アミーナ・ル・フレミング

イスラームは私の求めていた宗教だ

イスラームこそは私が学生の頃から求めていた宗教である。私の心はいつもキリスト教の教えに不満足で、大きくなったらそれを振り捨てた。真実の宗教であるイスラームに会えたのだ。イスラームに関心を持ったが、例えばアッラーの合一性¹の信仰など、その簡潔さが重要な点だ。それが私にアピールする。

イスラームは私に平安と幸福を、今までにないほど齎してくれる。

ジョアン・ファーティマ嬢

もし英国と欧州がイスラームになると、再び永久に強くなるだろう

キリスト教には、本当に満足できる解釈はない。そこではアダムとイヴの過ちのために、すべての人々は原罪を持って生まれ、自分自身で天国に行けるほどの何事も出来ないと考えるのだ。しかしムスリムは、人はアダムとイヴの罪のために罰を受けるとは考えない。彼らは、人は無辜の状態で生まれ、天国行きを諦めねばならないのは、いい年をしているのに知って間違っただけの行いをするという罪によってのみである、と信じる。

もし英国と欧州がイスラームに改宗すると、彼らは永久に強国となろう。英国と欧州のムスリムは、最善のムスリムに入る。

ハデージー・F. R. フェズーイー 英国

聖コーランについての改宗者の簡潔な見方

聖コーランは、誰の魂であれ最も求めるものを含んでいる

若い頃より、私は詩や建築などすべての面でイスラーム文明に大変感銘を受けてきた。そしてこれほどまでに文化の諸側面で美と価値という大変な財宝を世界に寄与できる人達は、必ずや哲学と宗教でも最高のレベルを達成しているに違いないと考えて来た。

イスラームに対しての熱心さから、私は古代から現代までのすべての宗教を比較

¹ ‘合一性’よりは、‘単一性’の方が、一神教の真意を突いている（編集者注）。

したり、綿密に批判したりしながら、学び始めていた。そして少しずつムスリムの信仰が真の宗教で、聖コーランが誰の魂であれ、その精神的な向上のために最も必要としているものだとの確信した。

エドアルド・ギョージャ イタリア

私はムスリムによる聖コーランの翻訳を学び、本当に高貴な教えと示唆に富んだ言葉に驚かされた

私はムスリムによる聖コーランの翻訳を学んで、本当に高貴な教えと示唆に富んだ言葉、それからまた賢明で実際的な日々の生活への助言に驚かされた。そしてどうして、ムハンマドは偽の預言者だと聞かされたり、もっと早くにこのすばらしい宗教の真実に耳を傾けなかったのかと、いぶかしく思った。

もしイスラームが忠実に行われるならば、世界が求めている心と体の平和を齎し、完璧な社会秩序を創建するであろう。

ハサン・V・マシューズ

聖コーランは真実に満ちており、その教えは实际的であり、

また独断的なところや神秘性がない！

ローマ・カトリック教徒として、私はその教えを相当学ぶ機会を得てきた。そして私は、それが唯一の真実な信仰だと自分に言い聞かせようと努めた。しかしその神秘性、ドグマ、「信じなければいけない」強制的な事柄が、私を黙らせてはおかなかった。そこで私は、真実を捜し求め始め、静かに長年の間、継続した。

ヒンズー教と仏教にもそのような「空洞」を見出し、イスラームを学ぶことだけが残されていた。一時は、私はイスラームを本当に忌み嫌った。イスラームはいやでその信者と関係を持つことも避けていたので、ムスリムの友達もいなかった。だから、イスラームに関する本を読んだら、自分が生まれ変わるなどとは、全く空想だにできなかった。徐々に私はイスラームのすばらしい教えの虜になり、さらに深く求めだすのには時間を要しなかった。わたしはイスラームのまっすぐで非神秘的なところが気に入った。それは清浄で簡潔で、同時に深い見識に満ちており、私はすぐにもはや避けがたいものがやってきたと感じた。

聖コーランのいくつかの節を読んだところ、私はすっかり驚かされた。私はバイブルに匹敵するようなものはないと考えていたからだ。しかしそれはまったくの誤りだということに気づかされた。本当に聖コーランは真実に満ちており、またその教えは实际的で、独断的なドグマ調や神秘的なところもなく、イスラームの「平和と愛」の宗教に日々引き込まれていった。

ムウミン・アブドル・ラッザーク セリア、スリランカ

イスラームの入り口で

どうしてイスラームを受け入れたのか？

どうして私はイスラームを受け入れたのか？それは栄光に満ちた全能のアッラーが、偉大な真実を認め世界に対して目一杯にそれを証言するよう、私を助けてくださったからだ。でも人間は、納得の行く証拠と説得力ある議論なしでは、色々の事実や現実について確信を持ちたがらないことも私は知っている。この様な人間の性向を思うとき、私が挙げた上の理由は真実を好みそれに興味を持っている人でなければ、満足行かないものだろう。また真実の光がさしこんでいない人も満足行かないであろう。

そこで私はイスラームを受け入れた理由と原因について書くと同時に、その教えを固く守ることにになる。喜ばしいことに、われわれのこの社会では人々は、経済的政治的あるいは社会的な誘惑に駆られてその宗教を変更したり、その信仰から離れるようなことはしない。あるいはあたふたと他の宗教を受け入れることもしない。改宗するのは、彼らの心を開いて精神的な安寧を齎すような強い誘引と効果的な要因がある場合である。さもなければ彼らは、不信と背教に甘んじているのである。

そこで言えるのは、私の取った行為、あるいはヨーロッパ人一般に、イスラームを受け入れるときは、経済的社会的な利益を得ようとしてではないということである。事態は全くその逆である。まず初めに、われわれヨーロッパ人は宗教的な問題に重要性を見出していない。そこでもしや宗教のことを気にする人がいるならば、それは神を見い出そうとする目的以外、何もないのである。私の場合も、イスラームに対する関心は全く、真実探求に他ならず、また正しい思考の方向を求めてであった。

私の心には真実探求の欲求が高まった。その願望は染み渡った。そしてその時に多くの疑いと不安が、私のキリスト教信仰とその根本についての観念と記憶の中で大きくなっていることに気が付いた。同時にキリスト教の力はこれらの疑いや不安に対して助力を与え擁護するには不十分でもあった。それは何の証拠や議論もなしで、あらゆる教えは受け入れられるべきだとしていたのだ。

例えばキリスト教では、預言者イエス・キリストは神の僕の罪滅ぼしのために全能の神に送られたと言うが、私は信じる事が出来ない。また全人類は不服従も含めて色々の罪に汚されている、そしてそれらの罪はイエス・キリストの十字架磔刑で許されるということも承服できない。そしてアッラー自身がその僕を救う力を持たれており、彼らが罪を犯さないように出来ると思った。また私はアッラーが何の説明も必要としないで、自らが僕の罪を赦す全能を持っておられるとも思った。かくして、崇高なアッラーはその僕の罪を赦すのに、何の説明も要しないのである。さらに預言者たちをして全人類の罪の肩代わりにはすることは、過ちと不正義の動機を全能のアッラーに転嫁することになる（神はお赦しにならない）とも思った。他方で人は何の躊躇や戸惑いもなく罪を犯すこともある。これらの疑念をキリスト教の学者や僧に訴えたと、彼らは私にそれらを打ち捨てて、何の留保もなしにキリスト教の信仰を受け入れるように勧めるだけであった。そして彼らはその信仰が納得行かないものだという考えを捨て、これからはそ

んな考えが浮上しないようにしろと言うだけであった。真実探求の願望は常に増大し、ついにすべてのそのような信仰と（啓示された）諸法を否定する決定的な瞬間を迎えることになった。

当時私は、ヨーロッパ文化と文明の豪華さに魅了されつつも、ムスリムであるということに誇りを持っていた、一人の有能で篤信なムスリムと出会う機会を持った。イスラームの恵みによって、彼は心の充実と精神的な平安を得ていると言った。他方私は宗教という名称にさえうんざりし、嫌気がしていたときであった。そのときに彼の言ったことは私には驚きであり、果たしてその教えを信奉した人に心の充足と精神的安寧を与えるような宗教があるのか、という点で頭がいっぱいになっていた。そしてイスラームの教えについて学ぼうという気になったのである。そのお陰で私ははっきり宣告する、イスラームこそはそれに従う者の心を活気付けるアッラーの永遠の宗教である。信者のあらゆる事柄、そして彼らのあらゆる困難を助ける。そして他宗教の教えや信仰から生じるすべての疑問と懷疑を除去してくれるのである。

イスラームが私に一番アピールした教えの一つは、思考や内省なくしてそれに従うことを求めなかったという点である。事実人はよく考えしっかり考慮し、それを受け入れる前にイスラームの教えを理解と知恵の秤にかけて精査するように言うのである。イスラームでは全能のアッラーが正義の源泉である。したがってアッラーが誰かを全人類のために罪を贖うようにさせることはありえない。アッラーはイスラームでは、全能、あらゆる永遠で崇高な属性を持ち、同時にあらゆる欠点と欠陥から免れておられる。このためイスラームでは、アッラーが人々に贖罪理論の下に犯罪をし、罪を畏れないという自由を与えたなどという考えは、全く通らないと主張している。

こうしてイスラームの永遠の教えが、私の宗教とその戒律に対する嫌悪の気持ちを一掃してくれた。そしてそれに代えて、宗教は人に終わりなき繁栄、名誉、成功と勝利を確保する恒常的で自律した一連の法であるという結論を得たのである。

この重要な転機において、私は生きてゆくための法に従うという見地からイスラームについて広範かつ重点的な分析を行った。他方で私の焦点は、イスラームがどのようにして人に心の平安と安寧をこの有為変転の時代に与えるのかということにも当てられた。そうしてこれら両者のアプローチにより、私の心が落ち着きを見出し、精神的にも静けさを取り戻してからイスラームを受け入れることが出来た。紙数の関係で、すべての私の印象や感情を述べることは難しい。ただイスラームへ導かれたいくつかの教訓については記しておきたい。

- イスラームは全人類をその創造の真の目的に導き、その高尚な目的達成を指導する。
- イスラームは平和と安全の教えである。人々に同胞と平等の絆を樹立し、色、人種、国籍の違いと争いを消滅させる。
- イスラームは社会的経済的な搾取をなくし、また人種差別も除去する。
- イスラームは、広大な広がりを持つ正しい導きに誘い、皆一緒に素直な道へと導く。

イスラームは生活の停滞と後退を阻止するだけではなく、全人類の前進と発展を要請する。人に資財を獲得することを許し、工業、商業上の発展を求める。またその活動が合法的で裏金でない限り、所得や報奨を得ることも認める。こうしてイスラームは

包括的な進展を目指す。あらゆる変革や優秀さを求める。その教えは、人が国際社会のメンバーであると感じ、その義務を理解し、人生の諸要求に従順であると思うような、正しくまっすぐな道を全人類と共に歩むものである。

10年ほど前にイスラームを受け入れてから、平安と静けさが私の引き裂かれ。悩み、そして反抗的だった心に再び訪れたのである。

私が充足と満足の生活を享受できていることに付き、アッラーへ、称賛と感謝を捧げる。

アブドル・カリーム・ハーバート博士

私の入信の場合

医者でありフランスのカトリックの家族で大きくなった者として、私がイスラームを選んだことで、しっかりした科学的な文化を得て、それは全く神秘的な面のない生活を準備してくれた。アッラーを信じた、というよりは、私の場合、キリスト教、特にカトリック教の教義と儀礼は、神の存在について確信させてくれなかったのだ。神の単一性についての私の感覚は、三位一体の教義やはたまたイエス・キリストの神性の教えを受け入れられないようにした。

イスラームについてよく知る前から、私はすでに「ラーイラー・イッラッラー（アッラーのほかに神はなし）」という信仰告白の初めの言葉や、コーランの関係の言葉を信じていたことになる。

だから最初にイスラームに従ったのは、形而上的な理由からだった。しかし他の理由もあった。例えば、カトリックの僧侶は神に代わって、人の罪を赦すことが出来るというが、私はそれを拒否した。さらに私はカトリックの聖餐式を受け入れられなかった。それは聖なるパンをイエス・キリストの体と考えるもので、その儀礼は原始的な人々のトーテム的なもので、生きている者にはタブーである先祖のトーテムをその人格を得るために死後口にするというのである。もう一つ私をキリスト教から遠ざけた理由は、特に礼拝前の身体的清浄さについて何も示さないということで、それはほとんどアッラーに対する冒瀆とも見えた。なぜならばアッラーは私たちに魂を与えられたと同様に私たちに体も与えられ、それを無視することは許されないはずだ。このような沈黙は時に人の肉体的生活への敵対心でもあるが、イスラームはこの点人間の自然と合致した唯一の宗教であると思える。

しかし最も重要で確定的な要素はコーランであった。わたしは入信の前に学習し、それも西洋知識人の批判的精神でであった。アッラーからの啓示であることを確信させるのに大いに貢献したのは偉大な書である、マリク・ベンナビ著『コーランの現象』Malek Bennabi, *Le Phenomene Copranique* であった。13世紀（編集者注：14世紀）以上も昔に啓示で降ろされたこのコーランには、最新の科学研究が示すのと同じ考えを教えている節がいくつもある。これらは確実に私を信仰告白の後半部分である、ムハンマド・ラスルッラー（ムハンマドはアッラーの使徒である）に導いた。

こうして私はパリのモスクで信仰告白し、そのムフティーによってムスリムと

して登録され、アリー・サルマーンというムスリム名をもらった。

この新しい信仰に私は非常に満足しており、もう一度宣告したい。

「アッラー以外に真の神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒であることを証言します。」

アリー・サルマーン・ベノイスト（フランス）医者

何が私をイスラーム入信に導いたか？

アーサー・アリソン教授はロンドン大学電気電子工学部長である。何年かかれは精神心理研究英国協会会長であった。彼の宗教研究の結果、彼はイスラームと出会った。そしてイスラームをその他の宗教と比較してみて、彼はそれが彼の生まれつきの性格と彼の諸要求を満たしていることを見出した。

彼は1985年9月29日から10月6日の間、エジプト医学協会主催の下、カイロで開かれた第1回医学的非模倣性に関するイスラーム国際会議に招待された。その会議において彼は、聖コーランにおける心理的精神的セラピーの方法について発表し、またムハンマド・ヤハヤー・シャラフィー博士と協力して集団章（第39章）第42節に照らした、睡眠と死亡についての発表もした。そこで示された諸事実は、彼にとって開眼させるものであった。

アズハルの長ジャード・アルハック、エジプトのワクフ大臣ムハンマド・アハマディー、そしてムハンマド・ヤハヤー・シャラフィー博士並びに、記者やテレビ特派員などが居並ぶ会議の最終セッションで、アーサー・アリソン博士は、イスラームは真実の宗教であり、アッラーが人を創造した際の生来の天性の宗教であると立ち上がって宣言した。それから彼は二つの証言（シャハーダタイン）をした。「アッラー以外に神はなく、ムハンマドはアッラーの預言者である。」

ロンドン発行のアラビア語週刊誌、アル・ムスリムーンのインタビューに答えて彼は自らのイスラームへの改宗について次のように言った。

「精神心理研究英国協会会長として心理学や関連学科を研究している中で、私はイスラームと出会うことが出来た。わたしはヒンズー教、仏教、それとそのほか若干の宗教や信条を学んだ。イスラームも学んで、それらと比較もしてみた。」

「“コーランにおける医学的非模倣性”の会議で、大きな違いのあることに気が付いた。それから私は、イスラームは私の生来の天性と行動に最も適していると確信した。心の中では、私はこの宇宙を支配している神がいると感じていた。彼が創造主なのだ。」

「だから私はイスラームを学んでみて、それが少しも理性と科学に反していないと思った。それは唯一の神、アッラーからの啓示による宗教であることも悟った。わたしは真実を証言するのに、二つの告白をした。それを口にしたとき、私は気楽で快適で満足に行く感覚と同じで、稀にして言いようのない感覚に圧倒されていた。」

アーサー・アリソン博士

どうしてイスラームを受け入れたか？

私は英国教会で大きくなり、日曜日といえばそれはこの国でほとんど制度化されたような過ごし方、英国式日曜日、をいつも経験していた。それとその日は、いつもあれをするな、これをしてはいけないといった躰の日でもあった。日曜日に行儀が悪いととんでもないことになり、他の日にするよりももっと悪いという風であった。

教会がまず朝一番の秩序であり、私がキリスト教教義の諸点を議論したり、その正確さを質したりすると、誰も答えられないのみならず、そんな質問をするのが間違っているといわれたりした。神がバイブルを書いたと聞いて、もしペンで書いたならオリジナルの文書はどこにあるの、あるいは誰が書いているところを見たの、とか私が質問したならば、女侍従は信仰ゆえの恐怖心を抱いた。

その出発点からして本当に非論理的で不可能な宗教に従うなどということは、私には退屈だけでなく、気分をいらいらさせもした。私は礼拝する神を愛したいだけでなしに、彼に興味と、あるがままの彼についての知識欲も持っていた。私に言わせれば、全知全能の神がその息子に世界を救うためにあのような不名誉で恥ずべき死を与えたとは思えないのであった。十字架磔刑をさせる神などは、全知でも全能でもないのである。もし全能ならば、神は人であれ、聖であれ一切の助力を必要としないはずだ。また最も慈悲深いならば、本来有罪である罪を犯した他人のために完全に無罪な人に苦痛を与えるはずもないのである。

さらに周りの様々な罪や間違いを見ると、その無罪の人の死によって少しも救済されていないのである。また議論をしてみると、キリスト教徒であるという半分くらいの方は、本当に信じているというよりは、そう言うておく方が変更するよりは簡単であるか、あるいは自分で色々考えるよりも簡単だというに過ぎないことが分かった。

日曜日の午後はいつも祈禱書や賛美歌の暗記で追われた。自分で信じていない教義の規則をオウム返しに繰り返させられるよりは、私の創造主について本当に崇高な真実を教えられる方が、どれほど良かっただろうか？そして最も重要なことは、私はとにかく確信を得ていないということであった。

「キリストの身体と血」と言う言葉を嫌悪し、それはプロテスタントでもそれらはただ比喩的理論的に解釈されただけである。聖体の件も私を憂慮させたが、ひっそりと私はそれについては決して確信がもてないと考えていた。賛美歌で終了する日曜日の夕刻に参加拒否するならば最も不服従とみなされ、従わないならベッドへ行けということになった。だから日曜日は退屈な長い一日であり、苦痛であった（日曜日の言動、作業、賛美歌唱和、教会）が、平日よりも私の行いは型破りとなった。

心からバイブルは嫌いで、それは快適さ、慰め、あるいは何の助けにもならなかった。大きくなってからは、それは多くの矛盾や異常な御伽噺や不可能なことを含んでおり、そのため嫌気がさし悲しくもなり、少しも救いや快適さはなかった。僧侶たちのように私の質問に答えるべき人達も、全く相手にならなかった。誰も説明できないような物語と御伽噺に満ちたそんな本は、なんの役に立つのか？何十人もの人が書き上げたのがバイブルだ。創世記に出ているようなことは、凡て科学と地質学に否定されている。

またダビデ王が詩篇を書いたなんていうのは間違いだという証拠や、他の人々に書かれたというほかの箇所もそうではないという証拠がある。こんなにたくさんの人がバイブルを作り上げたのであれば、誰を信じろというのか？

イスラームの聖なる本、コーランは全く異っており、預言者ムハンマド一人を通して降ろされた。変更、修正、改ざんあるいは転写されたバイブルとは違う、その最初期のテキストに忠実だ。コーランは私に強く印象付けられた。イスラームの教えは私に印象深かった。

こうして私はイスラームを受け入れた。それは真に快適で、高揚させ、助力してくれる。そして私は最初の一言からして勇気づけることなく、元気づけもせず、高揚もさせなかった宗教を捨てた。

アミーナ・アニー・スピーゲット 英国の婦人

どうして私はムスリムなのか？

小さい頃はキリスト教の教育を受けて私は大きくなった。でもこれはそう生まれついたということであって、自分で選んでそうになったのではない。幼い頃の宗教教育は大体親のそれに従うのである。そして後では、それはもう既成事実となっている。そしてわれわれはその後も何でも疑問を持ち調べたりするが、それも宗教、特にキリスト教の信仰だけは除外する。

キリスト教の教本であるバイブルを私は何度も読み返した。血の滴るような殺害や略奪、そして破壊、近親相姦、強姦、その他の悪行にその頁は満たされており、バイブルを読む人は誰でも背筋に悪寒が走る。実際読後には、このキリスト教の神の性向について疑問を持たざるを得ないのである。

ほとんどの家にはバイブルがあるが、それは外向けの飾りのようなものだ。もしそれを印刷家がページを切らないで配達したならば、それはまず間違いなくそのまま何年も経過することになるだろう。「宗教の話」という著書で、チャールズ・フランシス・ポッターは、「バイブルはアメリカではまず誰も知らない本である。しかしコーランはイスラームで誰もが読んでいる本だ。」と述べている。本当のところは、バイブルは「誰も読まない本」であるからこそキリスト教は助かっているのだ。そしてこのバイブルこそは、私をキリスト教から遠ざけたものであった。

キリスト教に何の興味ももてなくなり、私は世界のほかの宗教や様々な主義主張を学び始めた。結局それは不可知論と無宗教に終わった。しかし私の信じるところ、人には“生来深く根ざしたところ”から、天の創造主であり宇宙の支配者であるアッラーの存在を確信し主張するものである。その神は、流血、残虐、扇情的な中で栄えるものではない。この“生来深く根ざしたところ”に基づいて、私は再び宗教の勉強に立ち戻った。

イスラームは人の理性に訴える。仏教の悲観主義、神道や儒教のように神聖さを欠いているということはない。それはまた金銭ででっち上げられたものでもない。それは知識の探求を重視していると私は考える。キリスト教はいかに進歩と文明の行く手を

遮ったかについて、歴史は余すところなく伝えている。預言者ムハンマドの伝承できっちり立証されているものに、次のように言う。「知識の道を求める者は誰であれ、アッラーは天国への道へ導かれる。そして知識を求める者を天使たちはその翼を広げて迎える。学識ある者の礼拝だけ繰り返している者に対する優越性は、満月の星群に対するようなものである。」

もしや西洋でイスラームがもっと知られていたのなら、大変な信者の増加に驚かされたであろう。しかしそのように知られていないのは、イスラームについて権威ある、あるいは少なくとも偏見のない文献に接することが難しいからである。しかしそれは時間が解決してくれると信じる。

最後に言いたいのは、世界で、ラーイラー・イツラッラー、ムハンマド・ラスールッラーと証言する何百万の人達に、私も加わることが出来たのは幸せであるということだ。アッラー以外に真の神はなく、ムハンマドはその使徒である。

ハリー・E. ハアインケル

どのようにしてイスラームに近づいたか？

子供の頃私は聖書に通暁しているとして、いくつかの賞をとったことがあった。でもその宗教について知れば知るほど、私の不信はつのつた。14歳のときに、教会で「確信」の儀礼を行った。そこでは私はすべての疑念や恐れを克服し、神の魂の助けで諸困難に直面できるということであった。そしてその神の魂とは、私の頭の上におかれた牧師の指の間を伝って私の体に染通るというのである。そこで私の信仰は強まるのではなく、この儀礼で私の宗教はばかげた迷信や途方もない儀礼に満ち満ちたものに過ぎないという確信ばかりが強まった。

大学へ行く頃には、私のこの疑いはもう確信として固まっていた。キリスト教会はもはや何の意味も成さなかった。

イエスを高貴な聖人で殉教者として敬うことは出来たが、そこから彼を神に仕立て上げるのは、全くお門違いで、それはまた彼の教えに悖るものであった。自分が捨てた信仰の間違いを見つけるのは私には簡単だったが、しかし論理的な代替の宗教を見つけるのは難しかった。キリスト教は矛盾と迷信の塊に過ぎない。理知主義にしても非常に不満足な信仰しか提供しなかった。そこで私が学んできた凡ての宗教の最良の要素を結合するような妥当な宗教は見つけれなかった。

私が持っていたすべての考えを包含するような信条は既存のものには見出しがたいと、しばらく失望し、また長く自分の茫洋たる信条で満足しようと試みた。

そんなある日、ハワージャ・カマル・アッディーン著『イスラームと文明』を手にしたのだ。

その小さな冊子には、私の信条のほとんどすべてが含まれているのを発見した。キリスト教の非寛容に対するイスラームの広範な展望、無知と迷信に満ちていた時代におけるイスラームの中世の学問と文化、キリスト教の免罪思想に対するイスラームの代償という論理的な考え方、これらが最初に私に衝撃を与えた。それから私は貧富にかか

わらず導き、すべての信条や人種の壁を乗り越える信仰があるということを発見したのだ。それからムスリムの伝道ミッションから、私はさらに預言者の教えについて学んだ。ヲキング市のモスクのイマームは私の批判にいつも答えてくれ、彼の友好的で興味深い書簡はいつも私を勇気付け、この宗教についての質問をさらにすることになったのだ。私に示されたイスラームの教えにすっかり確信し、その精神的な需要を満たしてくれる力にも満足し、数ヶ月の内に私は、自分がムスリムであると思うようになっていた。

しかし私は考えて急がないことにして、自分の人生のガイドとする前にすべての角度から検討してみようと思った。

簡単に手に入れたものは失いやすく、すぐ取り入れた思想はすぐ手放すことになるというのが、私の考えであった。そこで西洋人の書いた預言者とそのメッセージを批判した書籍を出来るだけたくさん読破した。イスラームに敵対的なものもあった。しかし偏見なく良質な人の書いたものは、一般的にイスラームの価値とその教義が文明に与える意味に付いて認め、時にはその教えの真実なことも裏書していた。

さらに私はいつも高く評価していた学識ある友人たちに私の考えをぶつけてみることにした。驚いたことに彼らも私の見解に同意してきたのだ。中には、それまで知らなかったのだが、ムスリムもいた。その人のように、自分の考えはすでに何百年前に凡てムハンマドによって教えられていたのだということが発見したという人は、実はもっともったいものである。

この数ヶ月は私のイスラームへの思いは強まり、やっと真実に出会ったという信念は強まっている。漸く私は本当に理解し従うことの出来る宗教を持ち、人生に対しても新たな元気さを取り戻した。また本当の信仰を得たので、以前よりももっと幸いな日々を過ごしていることも実感した。私もそうであったように、自分の宗教に満足していない人たちに何とかイスラームを伝えたいという希望を持ち、その偉大で栄光ある信条の基調である心の平安を彼らにも与えたいのである。

T. H. マック・バークリー

イスラームへの改宗

私の知る限り、イスラームは最も完璧な一神教である。神には一切共有者や同列者はいない。彼は創造主、愛情深きもの、援助者、そして全宇宙の主権者である。われわれの誠実な礼拝と尊敬は彼のみに向けられ、そのすべての美称は被創造者が主張できない神だけの完璧な属性なのである。彼例外に同列者を認めたり、神性を認めることは、神の単一性に反するのである。

イスラームは私に真実、正しい信仰、そして創造主へと導く正しい道を示してくれた。そして9ヶ月イスラームと直面した後、私は何の躊躇もなくその真正なることを確信した。1985年6月3日、私はイスラームに入信した。ご存知のように、人は理性的な動物として、真実を支持するだけではなく、あらゆる場合に真実を宣言しそれを擁護するように義務付けられているのである。そうしないことは頑迷さ、気まぐれ、恥知らず、非宗教的であり、真実を無視することはわれわれの存在の拠っている創造主に

対する裏切りでもある。もし神がわれわれを一掃することを欲するならば、いつでもそうできたのだ。しかし彼はわれわれそれぞれに対して、聖なる目的を持っておられる。神がわれわれに何を欲しておられるかは、次の言葉に示されている。

「ジンと人間を創ったのはわれに仕えさせるため。」（撒き散らすもの章51：56）

私を正しくまっすぐな道に導かれたアッラーに称えあれ。私のすべての疑問に答え、イスラームへの信仰を強めたのは、その聖なる書、コーラン、のお陰である。

何年も前にイスラームを受け入れたヨーロッパ人である、マスュー氏に会った。彼は私にイスラーム信仰についてたくさん語り、その簡潔さと真実さが私に非常に深い印象を与えた。帰宅直前に私は聖コーランを読む機会を得て、深く印象付けられ、そしてイスラーム入信を決意した。マスュー氏にその手立てについて教えてもらい、英国に着くや否や、私に色々情報をくれたヘッドリー卿に手紙を送った。

イスラーム入信の最大の理由は、それが信心と真実に満ちている唯一の宗教であるという点だ。もう一つは他の宗教では色々派手な儀式があるが、それが私にロンドン市長就任式を思い起こさせるのである。

H. G. ネウィット

どのようにしてイスラームにコミットしたか？

私は1943年、第二次世界大戦最悪の時代に、ドイツのキリスト教一家に生まれた。家族はその年にスペインへ、1948年には、アルゼンチンへ移住した。そこで私は15年過ごし、高校はコルドバ市のラ・サルというローマ・カトリック系の学校に行った。期待通り私はすぐに熱心なカトリックになった。毎日より一時間以上に渡り私は講義を受け、カトリックの教えを学んだり、しばしばサービスに出席した。12歳のときの自分の夢はカトリックの僧侶になることであった。キリスト教の信仰に完全に心酔していたのであった。

しかしアッラーは私の愚考を見ておられ、7年前のある記念すべき日にアッラーは私の手に聖コーランが届くように計らわれた。父親はそれが私の視野を広げることと思い、それを読むことを妨げなかった。アッラーの言葉が私の心に与える結果については、全く懸念していなかった。そして私が聖コーランを開いたときは完璧なローマ・カトリックだったのが、それを閉じたときには、私は完全にイスラームに心酔していたのである。

もちろん読み始める前は、私は聖コーランに対しては好意的ではなかった。それは開いたのは、好奇心交じりで、どうせ間違い、冒涇、迷信、矛盾などを見出すだろうと考え、批判的にそうしたのだ。私は偏見を持っていたのだが、まだ若くその心は完全には固まっていなかった。初めはどの章もなんとなく読み、それから熱が入ってきて、最後には真実を求める渴望を持って読んでいた。そしてわが人生最高の瞬間がやってきた。それはアッラーが私を導き、迷信から真実へ、暗黒から明澄へ、キリスト教からイスラームへと導いてくれたのだ。聖コーランの恵み多き頁において、私はすべての問題

への解決策、すべての需要への満足、すべての疑問への説明を見出したのである。抵抗すべくもないような力でアッラーは私を彼の光へといざない、私は喜んで彼に従った。すべては明確になり、すべては理解され、そして自分を、宇宙をそしてアッラーを理解し始めた。

私は親愛なる先生たちに裏切られたと思い、彼らの言葉は完全な嘘で、それは彼ら自身気が付いていたかどうかとは関係なかった。一瞬にして私の全世界は、打ちのめされた。あらゆる観念は、再考を迫られた。しかし心の傷はやっと私の主に会えたという言いような喜びに打ち消され、私は彼への感謝と生気に満たされていた。わたしは謙虚に彼を称えそのお慈悲について祝福する。その助けなしには私は暗黒と蒙昧から抜け出られずにいたであろう。

喜び勇んで、私は新発見を両親、学校の友達、先生などに急いで伝えようとした。皆に真実を伝え、蒙昧と偏見から解き放たれ、同じ喜びを知ってもらいたかったのだ。しかし彼らの周りには砦があり、真実から遠ざけている厚い壁を見出した。それを除去するのは難しく、それは彼らの心の中の巖（イワオ）のようであった。そして私は非難と迫害に会い、彼らの盲目振りについては知らせずじまいになった。そしてアッラーだけが光を与えてくれることを知った。

知れば知るほど、理想的な宗教であるイスラームに導いていただき、私はますますアッラーに感謝を捧げることとなった。

あらゆる宗教の神聖な書き物を読んできたが、イスラームにある完璧さはどこにも見出せない。聖コーランは他宗教の書き物に比べれば、太陽の光であり、真実に対して閉じていない心を持っている人ならば誰でもアッラーの言葉を読めば、そしてアッラーがお望みになるのであれば、ムスリムになるであろう。そしてその人は、暗黒から光へと誘われるのである。

誠実に真実を求める人達全員に対してアッラーのご指導がありますように。アッラーが「人類にとり最良の人達」と呼ばれた共同体の真ん中で、彼らを迎え入れるべく両腕を広げてイスラームは彼らを歓迎する。

宇宙の主権者、アッラーに称えあれ、

サイフッディーン・ダーク・ウォルター・モスニック 米国

どうして私はムスリムになったのか？

人の心の深いところで、全能の神は存在するという事実の意識が芽生えるのである。われわれの宗教的な考えが形成されるのは、教育と生い立ちという環境に大いに左右されるものである。私の場合もそうで、カトリックであった両親は私をカトリックの僧侶にしようとさえした。しかし運命は私を極東のジャワへと連れてゆき、そこで私はムスリムたちがどれほど親密に彼らの信仰を大切にしているかを直接に見ることになった。そしてそれは私を開眼させた。キリスト教の僧侶によると、ムスリムは異教徒で、イスラームは奇異な慣行を伴うもので宗教ではないと、われわれの耳に吹き込んでいたのである。

真実を愛するものとして、正しい位置をイスラームに与えるために、私は6年前に虚偽で不公正な疑念に対抗し始めた。そしてロンドン、ベルリン、パリなどと同様に、オランダにモスクを建立すべく、幾人かの善良で立派な友人に呼びかけた。しかしまずイスラームのための戦いが必要であることが分かった。私は何人かの本当のムスリムの友達からイスラームについて学んで、そして聖コーランを学んでから、イスラームこそはずっと以前から私の宗教であったのだと確信した。

現在の唯一の違いは、公にムスリムであると言えることで、これは大変幸せなことである。人類に救済をもたらすアッラーを賛美するのに、今では私はムスリムの友人たちと一緒にそれをしている。

もっと早く信奉すべきだったと思うことは、私に痛みを感じさせる。しかし今後の私の人生は、世界で最良の宗教である、イスラームのために尽くすことであると約束する。

J. L. Ch. ヴァン・ベーテム (ムハンマド・アリー)

どうして私はイスラームを受け入れたのか？

この小論で私はイスラーム入信にいたる状況について簡略に述べたい。それはムスリム、非ムスリムを通じて何がしか役に立つところがあるかと思うからである。

私は宗教的な雰囲気の中で育ち、実際僧侶の道が期待されていたのだが、神は別の職業を用意してくれた。そこで事実を良く知ってもらった上でないと、私の現在を非難するにしても当たっていないということになる。

仕事と勉学に追われ、私はそれまでよりも宗教に向けられる時間はますます少なくなっていた。そして若い頃より宗教から自由にもなり、理詰めになり、ついにはそれまでは金科玉条だった宗教の事柄までも基本から疑問を持つようにもなった。でもまだ神への義務は果たし続けていた。

その頃第二次大戦が勃発し、私は中東へ従軍すべく徴兵された。そして約4年間、カイロでは良い友達も出来たが、彼らが聖コーランについて説明してくれたことが、その後数年してイスラームに改宗する最初の種を植えてくれたのであった。

戦後またもとの職業に戻った私は、もはや宗教については全く真剣な学習に戻る時間もなかった。そしてやっと時間が出来る頃には、もはやキリスト教の教えに適合することは難しくなっている自分を見つけたのだ。そしてその結果、私は教会に行くのを止めてしまったが、それ以外のあらゆる行動は偽善としか移らなかったからだ。

そうしたときに私はかつてエジプトの友人と交わした議論を思い出し、啓発されるかと考え聖コーランの英訳本を読むことにかなりの時間を当てるようになっていた。何回も読み直し、さらに私は預言者ムハンマド(祝福を)の言葉も熟読し、ついに長年求めていた真実の信仰がここにあると確信することになった。人生観は全く新たなものとなり、長くて暗い迂回路から抜け出たようで、すべてが明るい光明に照らされたようであった。

それから間もなくして私はヲキングにあるモスクに行き、マウラヴィー・アブド

ル・マジード師に相談した。彼の親切な助言と支援のお陰で私はイスラームの聖なる同胞関係に参画することになった。心から感謝している。「すべての称賛はアッラーに。」その日以来、言うまでもないが、私の人生には目的というものがはっきりしたのだ。

ここでイスラームの諸原則について議論するつもりはない。但しイスラームとキリスト教両方を細かく見てきた者として、言っておきたいことが一つある。それは平均的なキリスト教徒は日曜日の礼拝に出席し、僧侶たちが仕切っている間自分たちはどちらかという受身の役割を担うことで、神への義務を次の日曜日までは果たせたと感じるのである。それに比べてムスリムは、毎日モスクや自分の家で礼拝する。金曜日も集団で礼拝があるが、それでもこの個人性は生きており、個々人でもアッラーに対して何の仲介者や込み入った儀式なしで礼拝できるのである。

もし人々がこの国であれ西洋のどの国であれ、イスラームを十分評価できるようになれば、イスラームの位置づけは日ごとに上昇するであろう。しかし多数の自由思想の民には多大な不安があると共に、同時に古い信仰を捨てるのに道徳的な勇気を必要とするので、なかなか昔のものを忘れ切れないし、イスラームに切り替えられないのである。それは古い諸原則について異論紛糾しても、そうなのである。

この様な旧来の観念の一つは、イスラームは東洋人用であり、西洋諸国では日々の生活で適用できないというものである。もちろんこれは間違いだが、多数の人の感じているところで、それに対しては具体的な形で反証が提出されなければならない。例えば私のような改宗した人間のことや、またまだこれから入信しつつある人達のことなどについてもっと広く知らせ、そうして明日の同胞へさらに自信をつけることが重要である。

そこで私はこの目的だけのためであっても、ロンドンのど真ん中にすべてのムスリムが集まれるような建物が必要であると考え。それはまた非ムスリムが耳を傾ける機会を提供し、聖なる信仰を知り信者の礼拝の様子を見ることができるということだ。こうしてイスラームに関する誤解を解いてゆかねばならない。

この様な努力なしでは、相当イスラームは迷っている人達を導く機会を失ってしまうことになる。彼らは今までの信仰を拒否しても、新たな開眼を待っているのである。私自身がその何十万という人たちの良い一例である。

さらにイスラームの威厳が人の心に芽生えるだろう。英帝国の首都であり、世界の中心だというのに、イスラームにふさわしい建造物なしなんていうのは、信じられないのだ。

ウォーカー・H. ウィリアムズ

イスラーム — 私の選択

ある日、私の息子は目に涙していった。「もうキリスト教徒は辞めよう。ムスリムになりたいし、お母さんも一緒にそうしよう」と。それが、私がイスラームと関係した最初であった。それから何年かしてから、ベルリン・モスクのイマームがイスラームに導いてくれた。そして私にとって、本当の宗教はイスラームだと考えるようになった。

20歳という若い頃でもキリスト教信仰で言う、三位一体は受け付けなかった。イスラームを学んでからというものは、さらに懺悔、法王の神聖性や超能力信仰、洗礼などは信じがたいことが分かり、結局私はイスラームに入信した。

私の祖先は凡て熱心な信徒で敬虔な人達だった。私は僧院で育ち、人生観も宗教的なものであった。だからいずれかの宗教を持つべしというものが最初からあった。イスラームに入れて本当に幸運で、気持ちは落ち着くようになった。

現在おばあさんとして非常に幸せな日々を過ごし、孫たち全員は生まれながらにムスリムだと言っているのである。

「アッラーは嘉される人たちを正しい道へと導かれる。」

アミーナ・モスラー夫人 ドイツ

どうして私はイスラームを受け入れたのか？

私の生まれ育った家は、宗教的な側面ではイギリスの一般家庭と何等変わった点ではなかった。それはつまり、母親はキリスト教徒だが一切礼拝もしないし何の儀式にも参加しなかった。父親はそもそも宗教を信じなかった。私の小さい頃は、宗教学校へ通い、そこで英国教会系の学校で教えられる学科を学んでいた。他方家での会話は宗教とは何の縁もないものばかりであった。そして家で、神という言葉を聞いたことなど一度もないままに、過ごしていた。

教会学校で私はキリスト教の基本的な教えに満足していなかった。特に三位一体の観念や神あるいはイエスが、人々は十字を受け入れることでその罪をあがなってもらえるとする贖罪の信仰についてであった。たくさんの議論を聞かされたが、何を聞いても私には一方的な事実の一側面しか語らず、他方私はすべての側面を知りたいと望んでいた。学校を出る頃には、非信者になっていたのだ。

大学に入ってから、ムスリムと知り合った。それ以前にはイスラームについては何も読んだことも聞いたこともなかった。実際西洋の多くの人と同様に、私はそれについて偏見と誤解を持っていた。でも大学のムスリム学生たちは、静かにその信仰を語りしかもとてもよいマナーでそうしていた。私のすべての反論に答え、何冊か読むべき本もくれた。初めはすることもないときに、そのページをめくるくらいだったし、娯楽が気紛れにしか考えていなかった。でも少しまじめに読み始めたとき、少しずつ私の疑念は解消され始めた。

そこで私は注意深くそれらの本を読み始めた。その説明振りやコメントの新鮮さは驚きであった。その論理と議論は創造主と被創造者、そして死後の世界の観念を提供して、私は大変印象付けられた。

私はしばしばどうしてイスラームを受け入れたかと問われる。しかしそれに十分な回答を与えるのは難しい。なぜならば、あるヨーロッパ人ムスリムが言ったように、それは部分々々が互いに補い合う完璧な幾何学文様のようなもので、その美は調和と結合にあるからだ。イスラームが人に深いインパクトを与えるのは、まさしくこの点である。離れて見ると、イスラームの物事全般、動機、行為、政治についての説明など諸般

にわたる深い洞察は人を驚かせ、他方その詳細を見るとイスラームはまっすぐで真の倫理的価値に基づく比類なき社会生活のガイドであることに気づくだろう。ムスリムは何をするのであれ、アッラーの御名を唱える。そしてそうすることで、そのムスリムは自分をチェックし、より高いレベルに達しようとしているのである。こうして現世の日常生活と宗教上の必要性との溝は埋められ、両者は凡て相関しバランスを保ち、そして互いに必要とする関係になるのである。

アーイシャ・ブリジット・ハニー 英国

アーイシャ・キムへのインタビュー

アーイシャ・キムは韓国人だ。彼女は堅実で優しい心と強い意志を持ち、決めたらそれを守るタイプだ。イスラームの黄金の光りが彼女の心を照らしたとき、彼女は真実探求に邁進していた。それ以来彼女はイスラームの道を深めてきている。そして現在はそのムスリム名、アーイシャ、で知られている。韓国の女性たちの信仰の灯台となり、特に女学生を真実へ導いている。最初は、イスラームはむしろその夫であり、ムスリム連合の会長をしているイマーム・マフデヴォーン師に光を当てたが、しかし内省的にはアーイシャのほうが彼よりも深いものがあつた。真実の道をたどり始めたのは、二人とも一緒であつた。

アーイシャがイスラームに入信した頃は、戦争たけなわの頃であつた。アーイシャという名前を預言者（祝福を）の妻に倣ってつけたのは、そうすれば彼女に恵みが期待できるかと思ってであつた。彼女は言う、

「韓国の宣教師団をますます強烈に襲う思想的な攻撃に直面して、私はイスラームにこそ保証された真実の確信があることを見出した。」

アーイシャはジェッダ市の韓国イスラーム文化センターで、一時間半に渡ってインタビューを受けた。彼女は韓国の女学生らとともに、メッカに小巡礼をしてその帰路、ジェッダにいたのだ。イスラームと出会ったときの事を聞かれて、彼女は初め静かに目を閉じていたが、それは心の深い淵に隠されたものを探そうとしているようであつた。それから気持ちを正し、深い息をついて次のように言った。

「イスラームとの出会いの話は、韓国での昔の日々を思い起こさせる。私の家庭は中国古来の宗教の強い信者だった。国は戦争で疲弊していた。そして私はイマーム・マフデヴォーン師と結婚したが、二人ともまだイスラームからは遠かった。そしていつも私たちは現実から距離があることを、私は感じていた。」

真実への欲求の高まり

「韓国にたどり着き、私はさらに真実を求め、より気もそぞろになっていた。そして内なる声がして、真実に至るには唯一つしか道はないと告げていた。それはそれまでに私が知りえていた宗教ではなかった。」

「このとき朝鮮戦争が勃発し、また私たちは移動を余儀なくされたが、今度は国内で済んだ。韓国南部から西にあるプサンの港まで移動した。そして到着するや否や、

私は夫に信仰だけがわれわれと社会を救済する砦だ、と語った。」

「友人でオマル・キムという人がいたが、彼はもう亡くなった。イスラームを受け入れていたが、戦時中に彼は私たちに対してイスラームの伝導に努めるように言っていた。それに心が動かされたが、時あたかも国は戦争のために経済的・道徳的に破滅状態になっていた。混迷の底には、間違った信仰と迷信がはびこっていた。そんな悔やまれる状況であった。」

夫がイスラームに入信する前に持っていた懸念について尋ねられ彼女は言った。「彼が尋ねたので、私は彼に、すでにイスラームだけが良い導きだと開眼したのではなかったのか、と聞いた。しかし彼は何か分けの分からない不安と恐怖に駆られていたのだ。例えば入信後は二人の生活どうなるのか、といったこともあった。アッラーに従い入信したら、私は夫に従うということを告げた。」

「それは私の心の深いところから出たものだった。夫は驚き、私の方が真実を受け入れるのに先んじていることに気づいたのだ。」

「当時韓国に駐留していたトルコ部隊のメンバーと、オマルと夫の二人は知己を得た。ソウルから20キロも離れているのに、毎日のように彼ら二人は兵隊に会いに行った。そしてついにその探訪の幸せな結末を見る日がやってきた。1955年夏のある金曜日、夫はトルコ人イマームのアブドル・ラハマーン師立会いの下、ズベル・コチ師の手によって入信し、金曜日の礼拝に列席した。彼ら二人もやはり、トルコ兵であった。」

子供について

この後彼女は、子供のことを話し始めた。

「私はたった二人の娘を持っているだけだ。彼女らの難しい世渡りを心配したが、しかし私たちも長い間イスラームを知らないで過ごしていたことを思い起こした。自然が導いてくれるだろう。長女は当時25歳で、こう言った。「私の心臓はお母さんと一緒に動いているが、でもイスラームについて最大限獲得するまでは私は静観する」と。しばらくしてから彼女もイスラームに入信した。名前もユーンから、ジャミーラとなり、韓国人ムスリムと結婚した。次女は20歳で入信し、やはり韓国人ムスリムと結婚、この近くに住んでいる。」

「家族にことについては、すべてをアッラーに委ねた。イスラームへの入信は首尾よく行ったし、乏しい手段しかないが、イスラームの原則に基づく諸関係を維持している。」

招導（ダウワ）と伝導（タブリーグ）

「多数の韓国女性をイスラームに導いた。イスラームはどのようにして夫婦の互いの権利を擁護するかについて教えたし、それが家族生活にとってもどんなに健全な基礎を与えるかも教えた。この真実の道に多数を導けたのも、アッラーのお陰である。入信間もない女性の集まりをアレンジするようにしている。」

「アラビア語は後から学んだので、かなり不自由だ。新規の女性ムスリムにとっ

てそれは難しい課題だ。このため、韓国イスラーム文化センターではアラビア語部門を作ろうとしている。」

「もう一つの新規女性ムスリムの問題は、大半の人の宗教が力を持つ社会で生きてゆかねばならないということである。このため、士気を維持するため、彼女らの効果的な防衛策を考えなければならない。それはムスリムの教育システムからのみ可能となる。」

「現状としては韓国の女性ムスリムはソウルだけで組織化されているに過ぎない。福祉会合が貧窮者救済のためのプログラムを検討するため開催されている。その例は多いが、新婚のムスリム夫婦がイスラームの伝導に専念しているケースがある。」

将来への希望

年齢がいったからの希望について聞かれて、彼女は言った。

「アッラーの称賛あれ。夫、子供、そして私、全員がイスラームに入信できた。数回大巡礼と小巡礼を済ませた。1978年が最初で、その際ムスリムの共同体でどのようにして生活が進んでいるかを知ろうともした。サウジアラビアから韓国に戻るに当たり、私の心はそこに残ったままだ。預言者（祝福を）の町に終わることのない訪問をずっとしていたいという望みを抱いているからだ。」²

インタビューの最後に、周りの人から彼女の高邁なミッションについてあらゆる成功に恵まれるよう希望表明があり、コーランの一説で終了した。

「アッラーがもしあなたがたを助けられれば、何者もあなたがたに打ち勝つ者はない。」（イムラーン家章3：160）

アーイシャ・キム

どうして私はイスラームを受け入れたのか？

まず何を置いても、私の場合は基本的に、気が付かないうちにムスリムになっていたということだ。

色々の理由から、ずいぶん初期に私はキリスト教への信仰を失っていた。主要な原因は、聖職者であれそうでない人であれ、私が何を聞いてもいつも非常に単調な答えとして、「キリスト教の信仰については疑問を持つのではなくて、信じなければならない」と聞かされただけであった。当時私は理解できないものを信じることは出来ない、などと言うような勇気はなかったし、キリスト教徒と言われる人の大半もそうだと思う。そこで私はローマ・カトリック教会とその教えを離れ、三位よりは信じやすい単一の神に私の信奉を置くことにした。キリスト教の神秘や奇跡とは違い、教義や儀式から開放されて、生活は新しくより広い意味を持ち始めた。何を見ても神の計らいを看取した。私よりもっと偉大な人と同じで、自分の眼前の奇跡は理解できなくても、その不可思議さの前で屹立し驚愕することは出来る。それは木々、様々な花、鳥、そして動物などだ。

² 「ヤキーン・インターナショナル」 1984年7月7日、第33巻、No. 5, ページ第51-54.

生まれたての赤ん坊でも美しい奇跡であり、それは教会が教えるところとは異なる。子供の頃、教会で生まれたての赤ん坊を見て、「黒い罪で覆われている」と思ったことを覚えている。もはや私は醜さを信じず、美しさに目を奪われている。

そんなある日、私の娘がイスラームに関する本を持って帰ってきた。本当に興味深く、私たちは他の本も探した。そしてこれは本当に信すべきものだという確信を得た。キリスト教徒であった間は、イスラームはただ冗談の対象だった。だから読み進めた内容は凡て、天啓であった。その後、ムスリムを訪問し、いくつかの質問をした。そしてまたここでも天啓に恵まれた。私のすべての質問は即座にかつ簡潔に答えられ、キリスト教について質問したときの苛立ちは全くなかった。イスラームについて多くを読んで、また学んでから、私と娘はイスラームを受け入れることとした。名前はラシーダとマハムーダとなった。

何が一番印象深いかといえば、それはイスラームの礼拝である。キリスト教では礼拝はイエス・キリストを通じて世俗的なご利益を神にお願いするためであるが、イスラームではそれはすべて全能のアッラーの恵みに対して、感謝と称賛を捧げるために行われる。なぜならば、アッラーは私たちの福利のために何が必要かを知っておられ、お願いしなくてもそれを授けてくださるからである。

セシリア・マハムーダ・カノリー夫人 オーストラリア

どうしてイスラームは私の選択なのか？

学生の頃から私が求めていた宗教は、イスラームである。キリスト教の教えに満足しなかった私は、成長して一人でものを考えるようになってから、それを捨てることにした。卒業後私は数年間留学して、ユダヤ人やカトリックの友人と一緒に生活したが、彼らの宗教は満足行かなかった。今年になり故郷のスコットランドに戻ったが、偶然に友人の一人が私を「アト・ホーム」といわれる集会に連れて行ってくれた。それはロンドン市内のムスリム礼拝所で行われた（3 Campden Hill Road, Notting Hill Gate, W8）。そしてそこで本当の宗教である、イスラームと出会った。興味を持った私に一番印象深いのは、その簡潔さである。例えば、神の合一³ ということである。キリスト教徒として、三位一体、贖罪、処女の出産などは信じがたかった。そしてまた、無辜の男であるイエスが世界の贖罪のためにその命を捧げねばならないという信仰箇条などは、理解を超えており同時に全く不可能な事柄でもあるが、イスラームにはそのような内容はない。さらに十字架の刑は世界を少しも改善していない（イエスに倣おうとした若干の人を除いては）。私に言わせれば、世界はイエス・キリストの時代よりも悪くなっているのだ。

イスラームを理解しようとする考慮ある人にとっては、この簡潔で高邁な教えは必ずや支持されるであろう。

イスラームの教えは私に平安と幸福をもたらした。そしてそれは従来、未知のも

³ ここは「合一」よりは、「単一」の方がより適切である。（編集者注）

のであった。

ジョアン・ファーティマ・ダンスケン嬢

私のイスラームに対する誓い

私はロシアのタタル村で生まれたが、父親は医者でポーランドから逃亡してきたローマ・カトリック教徒であった。

両親は早くに亡くなったので、私は何の宗教、原則あるいは伝統もないロシア知識人階層に育てられた。正直のところ、英国と米国に住むまでは私は一切精神的なことについて頓着したことはなかった。しかし自然に私は人生では、指導原則と何らかの道德綱領が必要だと確信していた。そこでキリスト教を学ぼうとしたが、しかしその基本原則に納得いかず、それはあらゆる儀式や迷信を除いてもそうであった。例えばイエスの神聖性、原罪の教義、贖いなどである。本当の神はイエスというとても存在に影が薄くなり、世界は罪作りを重ねているのに一人の男の苦しみと死—それがどんなに神聖で、はたまた崇高であっても—が、その世界のすべての罪を贖うなどということも信じられなかった。

そこで私は自然とイスラームに向かった。自然に、と言ったのは、育ったところの環境からしてそれには一種のノスタルジアがあったからだ。あたかも家に帰ったようで、コーランやハワージャ・カマル・アッディーンの明確で説得的なイスラームに関する本などを読んで、私はイスラームこそは本当の宗教である、そしてそれは思惟し、また人生の現実と科学に目を閉ざさない人々のための宗教であると確信したのである。高邁かもしれないが、イエスの教えは禁欲主義と人生拒否か、あるいは人間の世俗的な生活に適合するため大変な詭弁とこじつけを必要とする。

これではイスラームの純粋な論理とどうしても太刀打ちにならない。それはアッラーの意思に服従し、彼の完璧さに向けての努力に尽きるのである。そこでは神学的な教義もなく、救済のための不思議な理屈もない。あるのは人生全体への完全なガイダンスと道德綱領で、それは人の理性を否定せず、また人の自然な感性も大切にする。本当に思慮ある人がそれを理解しないことなど、ありえないのだ。

イスラームを非難しようとする人達は、ムスリム社会の悪人どもを見て、その原因は国の物的政治的な状況からくる貧困と無知だということに意図的に目を閉じつつ、イスラームのせいにするのである。

もっと早くに真実を知っていればよかったと思うのは、そうすればもっと幸せであったということよりは、そのほうが早くにより役に立つ社会の成員でありえたということである。

C. サイーダ・ナミエー夫人

どうして私はイスラームを受け入れたのか？

1934年に生まれてすぐ、ドイツではカトリックであれ、プロテスタントであ

れ、教会を離れて、神を信じるという意味の「ゴットグラウビッヒ」になるのが流行っていた。しかし実態はそれと全く反対であった。

7歳の時、私より年長でしっかりした女の子が神は存在しないと言ったし、またサンタ・クロースは子供のために考えられたものだとも聞いた。それらが私の関心を厳格に向け直した。しかし当時世界は特に若い人にとっては、とても理解できる代物ではなかった。毎日空襲があり、父親は時々一日だけ帰宅し、母親は「われわれのかわいそうな兵隊」のために手袋を編み、近くの大きな家は負傷者のための病院になっていた。それが済んだと思うと今度は、変な人々がわれわれの家を接收し、アメリカの戦争映画が乱入してきたので、私の心は溶解してしまいそうだった。誰が正しくて間違っているのかも分からなくなり、すべては狂気の沙汰で無意味に思えた。何千もの何故があるのに、誰も満足に行く回答は与えてくれなかった。

私は神を捜し求め始めたが、どんなに努力しても神はカトリックにもプロテスタントにも、あるいはエホヴァの証言にも見出せなかった。これらの宗教の神への道は、信じるのが出来ないような教義で満ちており、また全く实际的でない禁則に満ちていた。初めから自分の欠陥のために自責の念に苦しめられると分かっているような信仰を、どうして受け入れることが出来ようか。

イスラームを7年前に受け入れた若いヨーロッパ人と私が会うことが出来たのは、本当に奇跡であった。私の最初の質問は彼の宗教のことで、それがイスラームだと分かったので、もっと教えて欲しいと言った。それまでに知った宗教で覚えた失望のために私は大いに懐疑的になっていたが、彼がムスリムという言葉の意味、つまり自由意志に基づき神の命令に服従すること、と説明してくれて、それからというものは私の中で何かがうごめき始めた。さらに彼はすべての人、動物、植物、それから宇宙のあらゆる存在は、食べたり飲んだり、出産したり、何でも神の掟に従わないならば自ら破滅の道を開くだけであり、逃れようもなくムスリムだと言えとした。人だけはイスラームを精神面で受け入れることが出来るが、物質的な側面では動物や植物と同じく自分の生まれつきの衝動に従っており自由意志は享受していないと言った。

イスラームの教え全体におけるこのすばらしい論理と純粋の常識が私を最もひきつけ、またいくつかの根本的な教義についてはドイツ語では偏見のないものは少ないが、出来るだけ読書に務めてイスラームを学んだ。今は私の夫となったこの若いムスリムは、私に疲れ知らずに説明しあらゆる質問に答えていた。イスラームの背景にある深い意味については、ムハンマド・アサドの「メッカへの道」を読んで理解できたし、こうして私がムスリマとなる日が訪れたのだ。

ファーティマ・ヒーレン 西ドイツ

どのようにして私はイスラームに入信したのか？

ファーティマ・ミック・デイヴィッドソン夫人はトリニダード・トバゴ共和国の社会開発・地方政府担当大臣である。有名なアラビア語の雑誌、ミンバル・アルイスラーム（カイロ発行）が彼女にしたインタビューで、彼女（旧姓はモデル・ドナファミック・デイヴィッドソン）はイスラームとの出会いやその後のイスラームへの改宗について語

った。

「キリスト教を1975年に捨ててイスラームに入ったというのは、完全に違う。自分でもどうなっていたのかまるで分からない。1950年3月9日、私がキリスト教の修道院に入ることになっていたその日まで話は遡る。その朝、目を覚ました時、私の耳にはアッラーフ・アクバル、アッラーフ・アクバルの声がつんざくように聞こえ、自分の内部は震えていた。どうしたのか。私にとってイスラームが基本なのだ。」

「どうなっているのか分からないが、私は修道院に入るのを拒否していた。それから何年かアッラーの導きを求めて過ごしたが、ついに聖コーランの訳を入手した。すぐさま私はそれに信を置いた。それから私はパキスタンのマウラーナー・スッディークと言うムスリム学者やインドのシェイク・アンサーリーに出会った。自然について、またそれに関して私が感じる場所について、詳細な話をすることが出来た。そうしてこれらの学者は、驚いて言った。：アッラーに感謝を、あなたはもうムスリマです。何でも好きなものを読んで、そして礼拝しなさい。あなたを歓迎し、いつでも何でも学ぶのに手助けしましょう、と。」

信仰は至福

「私は幸せだった。そのとき以来、心は信仰の至福に満たされ、預言者ムハンマド（祝福あれ）への愛と尊敬に満ち満ちていた。正式に入信したのは1975年だったが、あの修道院の前で不思議な声を聞いて入るのを止めたあの時以来、私は33年間ムスリムだったのだ。私は心で、「アッラーは偉大なり」と宣告したのだ。」

「私はモスクに入る初めての黒人女性だった。それを契機にそれから多くのムスリマが礼拝のためにモスクに入るようになった。特に、偉大な学者であったシェイク・アンサーリーがトリニダードのフランシス市に建てた、アンジュマン・ジャーミウ・サンタナル・モスクはそうであった。そこの現在の長は、アルハッジ・シャフィーク・ムハンマドである。」

「以前には、同地の住民はイスラームというのは多数の信仰体系を持っていたインディアン宗教だと思っていた。彼らは運命や救世主に重きを置く考え方を持っていた。」

「アフリカからの出身者を中心として、その後ムスリムの数は増えて、共和国人口の13%に上った。他方31%はカトリック、27%はプロテスタント、6%はヒンズー教徒、23%はその他であった。」

彼女の仕事への効果

大半はムスリムではない国で入信して、彼女の仕事に与えた影響はどのようなものだったのだろうか？

「イスラームはわれわれ信者に、有効で誠実な義務の履行を求めている。私は信仰の教えに忠実に従っている。公私に渡って嘘はつかない。出来る限りそして意識して、イスラームの教えに背くことは拒否している。改宗の仕事への影響は、凡て恵まれ良好である。国の首相は私にエジプトを訪問するように助言した。というのも同国は、有名なアズハル・モスクがあるし文明の母だ。彼はイスラームについて色々述べていた。」

「そこで私は社会開発・地方政府担当大臣としてエジプト行きについて首相の許可を請うた際、彼は同意し、アズハル訪問と米英において色々聞かされたイスラーム最高評議会訪問を助言してくれた。」

「何回も選挙戦を経験したが、ムスリマであるにかかわらず凡て成功した。私は教育文化大臣もしたし、内閣付き国務大臣もした。ムスリマであるにかかわらず、である。」

「大切なことは、トリニダード・トバゴ共和国では、犠牲祭と断食明け祭の両方を国の祝祭日にもした。国中で、ラマダン月を家でもモスクでも祝うことが出来る。」

「イスラームの世界で仲違いを収めて、人類に平等をもたらしたイスラームという優れた宗教の下で団結すればそれは力を発揮するということを言いたい。イスラームはまたわれわれの諸関係や取引も定めてくれる。だから互いに戦闘行為は停止し、すべてを交渉、協議、そして互いの理解で違いを埋め、紛争を収めることは可能なのである。」

「全能のアッラーは私をイスラームに導かれた様に、全ムスリムが兄弟関係と平和を樹立出来るようにと、彼に祈る。そうして人類に打ち立てられた最良の共同体を現時点で確立できるように望んでいる。」

ファータィマ・ミック・デイヴィッドソン夫人、社会開発・地方政府担当大臣
トリニダード・トバゴ共和国

2007, March

Publisher: Muslim Students Association Japan

in collaboration with www.Islamhouse.com

© 2007 Students Association Japan and www.Islamhouse.com

<http://msaj.info>

Printed in Saudi Arabia